

21年共通テスト国語解説

【全体概観】（前年比やや難化）

文章や設問の難易度は標準的。しかし、「複数文章の比較検討」という新しい出題方針のために、読む（精読を要する）文章量が増大。時間との戦いになった受験生が多かったと思われる。昨年よりはやや低めの平均点になるであろう。

第1問（論理的文章）は「妖怪」の捉え方の変遷を述べたもの。芥川龍之介の『歯車』も引用された。本文理解はしやすい。ただ、昨年より設問が増加しており、読むべき分量も増えているので平均点は昨年よりやや低めか。**第2問（文学的文章）**はセンター試験と同様に小説からの出題。小説の批評文も取り上げられたところが新傾向。ここに時間を食われる可能性があり。平均点は昨年よりやや低めか。**第3問（古文）**は歴史物語からの出題。総合的な出題であり、実力差が如実に表れたであろう。平均点は昨年並みか。**第4問（漢文）**は漢詩と散文を組み合わせた出題。設問内容に特殊なものはなく、難易度も標準的だが、ここに時間を残せたかが問題である。平均点は昨年並みと思われる。

範囲は「国語総合」の教科書で、高校一年の学習範囲。消去法に頼らず積極的に正解を選ぶ方針で臨むことが時間短縮につながる。ゆえに本解説では正解を導く道筋に主眼を置く。また、今年共通テスト最初の年なので、従来のセンター試験との比較を示した。参考にされたし。

【第1問 論理的文章】（標準）

総評

出典Ⅱ香川雅信『江戸の妖怪革命』

芥川龍之介『歯車』

センター試験と同様に評論文の出題であった。センターの作成部会は「評論文を通じて論理的思考力を問う」と述べていた。その意図は引き継がれている。今年妖怪観の変容について論じた文章であり、最後の設問では小説も引用されていた。「複数文章の比較検討」というテーマに即した出題である。理由説明が姿を消して内容説明の比重が増大した点は取り組みやすかったかもしれないが、設問数が増加したため時間がかかって焦った受験生は多いだろう。

設問は消去法に頼らず積極的に正解を選ぶべきものばかりである。間違え選択肢の表現も本文中の言葉を用いているため、単に本文中の記述の有無だけで判断しようとする正解にたどり着けない。問2・問3は平易な内容説明。説明・定義の文型に着目すれば容易な、いわゆる「記号操作」の分野の設問と言える。問4は典型問題。「」と変化の説明が要求されており、センターの過去問演習を積んでいた受験生には取り組みやすかったはずだ。問5が新形式。ただ、問われている能力は別段変わるものではない。問題提起に気づく、対比を捉える、具体と抽象の関係を把握する、など「センター頻出」の能力である。形式の変化に右往左往せず、今までのセンター試験からも多くを学び取ってほしい。

問1 漢字の書き取り〔標準〕

解答

(ア)③ (イ)① (ウ)②
(エ)③ (オ)①

同音異義語が多い。文意を考えて適切な漢字を判断する必要がある。

(ア)「民俗」。①所属、②海賊、③良俗、④継続。「民族」と書くか答えが出ないので注意。「民俗」は民間の習俗・伝統文化のこと。

(イ)「喚起」。①召喚、②返還、③栄冠、④交換。選択肢の語も同音異義語が多い。文全体をよく読んで考えよう。

(ウ)「援用」。自分の意見に説得力を出すために他の文献を引用すること。①沿線、②救援、③順延、④円熟。

(エ)「隔てる」。①威嚇、②拡充、③隔絶、④地鼓。訓読みの出題もセンターを踏襲。

(オ)「投影」。①統合、②倒置、③系統、④奮闘。ここは平易か。

センター試験と比べて

なぜか四択になったものの、出題形式は変化なし。漢字力は国語の基本。漢検二級を目標に訓練に励もう。普段からの学習が肝要。

問2 換言〔やや易〕

解答

①

第3段落の内容理解を問う設問。評論文の形式段落は、最初にテーマを示した後に論を展開し最後にまとめるという「双括式」の構成が多く、今回もその構成である。ここに気づけば傍線部の言い換えが段落最初の文の「日常的理解

を超えた不可思議な現象に意味を与える」ものだと分かる。①がこの内容に忠実である。問1で記した「民俗」の理解があればさらに分かりやすい。

なお、この問題は消去法だと無駄に時間を食う。誤りの選択肢も全て段落内の言葉を用いて書かれているからだ。国語は視力検査ではない。必ず自身で正解を考える姿勢で臨むこと。

これだけは覚えよう

・文の主要三構成

a 頭括式 (↓演繹的)

最初に結論を述べ、後に具体例を論ずる。

b 尾括式 (↓帰納的)

種々の具体例を論じた後に結論を述べる。

c 双括式

最初と最後に結論を述べ、その間に議論を展開する。

センター試験と比べて

センターの換言問題以上に根拠の箇所が明確であった。今後このような平易な問題が導入として前半の設問で出題される。消去法に頼らず積極的に正解根拠をつかまう。

問3 換言(定義)「やや易」

解答 ②

未知の語の定義を説明する問題。一般的に、未知の語は初出の箇所^①で説明されるものである。今回は第7段落第一文の後半に着目。「フーコーの言うアルケオロジーは、……のことである。」という定義の構造になっている。「思考や認識を

可能にしている知の枠組みの変容として歴史を描き出す試み」と同意の選択肢である②が正解。「変容として歴史を描き出す」と「時代とともに変容するさまを記述する」が同意だと判断できたか。言葉自体の有無ではなく意味の異同を判断する意識を持つとう。なお、問2同様、誤りの選択肢も全て本文中の言葉を用いている、消去法厳禁。

センター試験と比べて

センターの中でも散見された、平易なタイプの換言。センター以上に設問ごとの難易度の差が明確である。前半の設問での失点は厳禁。消去法に頼らない姿勢は時間短縮にもつながる。

問4 対比・換言「標準」

解答 ②

「表象」がカギカッコ付きなので、この説明は必須。ここでは単なる強調でなく、本文独自の意味を有する。また、「く化」の説明なので変化前と変化後を対比的に説明する必要がある。まず「表象」の説明。初出は第13段落。人間の支配下にある記号Ⅱ「表象」、という定義が記されている。傍線部直前の指示語「こうした」に着目しても同様のことが読み取れる。さらにその直前から、「表象」Ⅱキャラクター・フィクションナルな存在・娯楽の題材、という情報も得られる。第14段落冒頭からは「形象性、視覚的側面が重要」だということも分かる。

では「表象」化以前はどうか。ここまでの分析から、人間のコントロールが及ばなかった、と

推定できる。実際に第11段落第3文に、「妖怪は神霊からの「言葉」を伝える「記号」だった」という定義の形がある。第13段落にも「神霊の支配を逃れて」とある。古来、神霊は人間の制御が及ぶ存在ではなく、それゆえ畏怖のたいしようとなっていた。

図式化する。

変化前Ⅱ神霊の支配下Ⅱ神霊の言葉を伝える

妖怪

←

変化後Ⅱ人間の支配下Ⅱフィクションナル

娯楽の対象

この内容を表す②が正解。「フィクションナル」は「架空」、「娯楽」は「楽しむ」と言い換えられている。なお、⑤が紛らわしいが「警告」はあくまでも「多くの場合」であり具体例に過ぎない。また、「人間の性質を戯画的に形象」は誤り。娯楽の対象は架空の妖怪だ。

これだけは覚えよう

・カギカッコの働き

1 引用

2 強調

3 作者言語(本文独自の意味を添える)

センター試験と比べて

カギカッコ付きの語の説明も変化前後の対比もセンター頻出。典型問題は不変。

問5 全体把握

(i) 表現分析「やや易」

解答 ④

段落ごとの働きを分析する設問。漠然と読むのではなく、働きを決定づける表現に着目したい。今回、「1」「5」問題設定」と記されている。疑問文など、問題提起の表現を探そう。第1段落以外には第5段落の第一文・第二文に見られる。ゆえに「II」には「問い」が入ると分かり、③・④に絞られる。次に第2段落に着目。「確かに、A。しかし、B。」という譲歩構文が用いられている。この場合重要なのはBである。さらに「つまり」以下でBの内容がまとめられている。この段落の主眼は「妖怪という領域の歴史性」である。第3段落はその補完としての説明である。(内容は問2で見た通り。) 以上より、「歴史性」に着目した④が正解。

これだけは覚えよう

・疑問文の働き

↓問題提起。疑問の形式をとることで読者の思考を誘導し、著者自らが論証・結果提示を行う部分へと誘導する。

・譲歩構文

↓「確かにA(一般論)。しかしB(主張)」の形。言いたいことはBである。

センター試験と比べて

形式は真新しい。しかし、実際は表現分野の知識に基づく分析である。単に表現の知識を問うだけでなく内容把握への活用を求める点で、より思考力を要するものとなった。

(ii) 対比(変化)「やや易」

解答 III ④

IV ③

近世から近代への妖怪観の変化の流れの中で本文後半の理解を問う設問である。問4同様に変化を対比的に捉えたい。

III は問4を誘導とすれば平易。ただし④「人を化かす」は不適。③「視覚的」「キャラクター」は問4の分析で把握済み。妥当。

IV は選択肢が全て「人間」となっているので、近世との対比から近代の人間について把握する。次のような図を書けるとよい。

近世 II 「万物の霊長」 II 絶対的・合理的
人間
←
近代 II 不安定・コントロール不可能

この対比を満たすのは④のみ。

センター試験と比べて

センター試験と比べて

センターの作成部会は「受験生の思考過程に沿って設問を並べ」と述べていた。前の設問が誘導となる傾向は踏襲されている。

(iii) 具体例分析「やや難」

解答 ②

本文の主張の具体例となっている小説を分析する問題。「複数文章の比較検討」という共通テストの理念に即したものである。まず「本文の具体例が小説」という関係性を把握できたか。【ノート3】の三行目に「例として」とある。

本問のように選択肢が長い場合、まずは選択肢がどのような構成であるか分析するとよい。

今回は全ての選択肢が『歯車』の僕は、……と知った。僕は……(心情)。これは、……この

例にあたる。」という構成である。「僕」が知った事実、「僕」が抱いた感情、抽象化部分、の三つの要素から成る。選択肢の共通性はヒントにできる。

「事実」に関する記述は②・③・⑤が正しい。僕は自身がないはずの場所で別の人物に「見かけられていた」のである。(ここも小説中の複数の具体例を抽象化する思考である。)そして「僕」の心情・内面は小説の引用部末尾「死はあるいは僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかった。」に記されている。ゆえに妥当なのは②のみである。さらに、ここは本文第17段落「不気味なもの」の具体例。「不気味なもの」は前問の分析より「制御不能」と同意と判断できる。それを満たすのは②・⑤である。

以上の分析から正解は②となる。

センター試験と比べて

「複数文章の比較検討」は新傾向の問題である。まずは引用された「もう一つの文章」が本文とどのような関係にあるかを把握したい。

具体と抽象の関係を考えることはセンターでも頻出であった。今後も普段の学習から意識していきたい点である。

センター試験と比べて

「複数文章の比較検討」は新傾向の問題である。まずは引用された「もう一つの文章」が本文とどのような関係にあるかを把握したい。

具体と抽象の関係を考えることはセンターでも頻出であった。今後とも普段の学習から意識していきたい点である。

【第2問 文学的文章】(標準)

総評

出典Ⅱ加能作次郎「羽織と時計」

宮島新三郎「師走文壇の一瞥」

センター試験と同様に小説文の出題であった。センターの作成部会は「小説文を通じて表現分析力を問う」と述べており、これも評論同様に引き継がれている。今回も昨年同様に戦前の作品からの出題であったが、特に読みづらくはなかっただろう。語彙のレベルも標準的である。

問われている内容もほぼセンター試験と変わらない。心情表現などに着目して主観を交えない精密な分析を行いたい。問1は例年通り語句の意味を問うている。問2～5の部分読解は、問2が心情自体を、問3が心情の対象となる状況を、問4が前提との対比を、問5が行動の分析を問うており、従来のセンター試験同様に、各々の設問に明確な役割があった。問6が新機軸。文芸批評の文章を引用しての設問であった。文芸的な語彙や表現の知識も有効に活用できる良問であり、より思考力を問うものとなった。心情を説明する際は、まず「a」心情(プラス・マイナスの把握)↓「b」対象(心情を喚起する現実の状況)をつかむこと。心情に至る理由としての状況分析が対象把握の第一歩である。さらに必要に応じて「c」前提(「予想・常識・過去・他人等」とのズレ)を把握する。今後は現代詩やエッセイ(随筆)の出題も予想されるが、おしなべて文芸的文章は内面の把握が肝要である。小説の学習は必ず役に立つ。

ところで、「小説の鑑賞は個人個人で異なるのだからそれを試験で問うのはおかしい」という言説がある。勘違いも甚だしい。センター試験も共通テストも「個人で異なる鑑賞」など一切問うていない。その鑑賞をする前提として誰もが共有可能な本文理解のみを問うている。問題が解けないのは出題者や作者と感性が合わないからではない。単に分析力の不足による。

問1 語句の意味〔やや易〕

解答

(ア)② (イ)② (ウ)①

本文に当てはめるとどの選択肢も通用しそうに思えてしまう。原義に忠実な選択肢を選ぶ。

(ア)「術」は「手段」の意。「手立て」が同意。

(イ)「くぐれる」には「くそびれる」と同様に「時期を失する」という意味がある。

(ウ)「足が遠くなる」は足が向かないわけだから、「訪れない」の意になる。

センター試験と比べて

変化なし。語彙力は国語の基本。一朝一夕に身につくものではないので、普段から新聞など「大人の言葉」に触れる機会を増やそう。漢字練習も効果的。知識問題集を解くのもよい。

問2 心情説明(心情)〔やや易〕

解答

③

典型的な心情分析の問題。傍線自体は比喩なので、まず心情自体を明確にする。本問はそれで正解を出せるが、万全を期するなら「対象」と「前提とのズレ」も意識しよう。

「擦られるような」Ⅱ「くすぐったい」気持ちには「照れくさい・きまりがわるい」などと同意。

うれしさや気恥ずかしさが同居した状態である。うれしさの対象は妻が私の羽織をほめていること。しかし羽織は実際は私がこしらえたものではなくW君に貰ったものである。それなのに妻は私が貧しい身でありながら結婚を機にがんばって仕立てたと思ひ込んでいることが「きまりわるさ」を生んでいる。

本問は心情自体を理解できていれば③の「うれしさとうしろめたさの説明」を容易に選べる。ゆえに単なる換言問題ともいえる、ただ、この心情はしっかりと構造を把握したい。

a 心情Ⅱくすぐったい

b 対象Ⅱ妻に羽織をほめられる
(私が仕立てたと思っている)

c 前提Ⅱ羽織はW君に貰った

このように「前提とのズレ」を意識すると心情は明確になる。

センター試験と比べて

センターの典型を引き継いだ設問。心情分析の方法は確立しておきたい。また、プラスとマイナスの入り混じった複雑な心情はセンターでも頻出であった。人の心はそんなに単純ではないのだ。

問3 心情説明(対象)〔標準〕

解答 ①

マイナス心情の内容説明。前問と異なり心情が明確なので、対象の把握が重要となる。

傍線部の心情を喚起する状況は直前にある「羽織と時計という高価なものをW君に贈られた」ことである。これは直前の段落から「W君の恩義・厚い情誼」と分かる。設問はこの「対象の正確な把握」で正解できる。ただ、これがなぜ「重苦しさ」を引き起こすのかを確認したい。

W君は私への恩恵について周囲から非難を受けている。しかしそうした非難を受けて「までも」私のために奔走してくれたのだ。このことがW君の恩義をより重いものにしていくのである。なお、一般的に、「対比は心情を強調する」といえる。ここではW君の恩義の重さは「非難を受けても」という「マイナスとの対比」によって強められている。これが①の「過剰なもの」の裏付けとなる考え方である。

センター試験と比べて

対象の正確な把握はセンターでも頻出であった。心情の説明においては「心情を引き起こす状況」が肝要である。なお、これもプラス・マイナスの二面的な心情が描かれた部分である。

問4 心情説明(対比)〔標準〕

解答 ①

「妻君の眼」のマイナス性を抽出する設問である。「前提とのズレ」を意識する典型。

傍線部Cと同じ段落には私が推測する妻君の

非難が列挙されている。特に「そればかりではない」(61行目)以降に記されている妻君の言葉(推測)中の「薄情な方ね」が明確なマイナスの言葉となっている。その次の段落ではその言葉の含意が説明されている。「こちらでは尽すだけのことは尽してあるのに」に着目すると、心情の構造は次のように説明できる。

a 心情⇨恐れ

b 対象⇨妻君の眼

c 前提⇨W君は私に十分尽くした

⇨のに

この構造を反映しているのは①のみである。

センター試験と比べて

センターの典型を引き継いだ設問である。この「前提とのズレ」に着目する設問は毎年出題されていた。心情説明の本質は不変。

問5 行動分析〔標準〕

解答 ⑤

行動の理由(となる心情)の説明問題。根拠の箇所は明確であり、傍線部自体も合わせて精密に分析できれば容易に正解できよう。

傍線部の行動の理由は直後に明示されている「偶然を装ってW君の妻や従姉に会う」ことである。その目的は68行目から73行目にあるように、W君への後ろめたさを軽減しつつ会いに行

くためである。そのため私は「遠回り」してまでW君の店に向かったのだ。

しかしこのことを私は妻に伝えず、「子供に食べさせるのだから」と嘘の理由を告げている。以上の理解が全て記されている⑤が正解。

センター試験と比べて

傍線部自体の分析を要する問題もセンターで多々出題されていた。根拠を拾う際に、受験生は傍線の外にばかり目がいきがちだが、まずは傍線部自体をしっかり分析したい。

問6 批評文の分析

新機軸の問題。文学的文章には確かに「文芸批評」の文章も含まれる。

(一) 換言(やや難)

解答 ④

「ユーモラスなものにする」「作品の効果を増す」の二点を説明する。

まず、「小話」が「しゃれを利かせた短い話・笑話」を意味すると分かれば、「ユーモラスなものにする」とは「小話」的にする、すなわち「一面だけを狙って作品を作る」ことだと分かる。第2段落の第一文も理解の助けとなる。

そして「作品の効果を増す」とは批評文の第一文にあるように「多角的な描写」による。それができていないということは、描写が「一面的・断片的」であるのだ。以上を満たすものは④である。なお、③には内容面の誤りがないが、「ユーモラスにする」の説明が欠落しているので不可。ここも消去法が通用しない。

センター試験と比べて

文芸評論の出題という新形式である。問われる能力は換言であるが、文芸方面の語彙力も重要となっている。

また、「不足しているから誤り」という選択肢の作り方はセンターでも多々見られた。正解根拠をつかむ方法での学習は必須。

センター試験と比べて

表現知識を直接問う設問は姿を消したが、表現知識の活用は相変わらず必要である。第1問の問5(1)でも述べたが、より思考力重視になつたと言えよう。表現知識の習得も怠ってはいけない。思考・分析の道具となる。

(ii) 表現分析(やや難)

解答 ④

設問文には「評者とは異なる見解」とある。評者は「羽織と時計」への執着を否定的に述べている。ゆえに「羽織と時計」の働きを積極的に捉えているものを選びたいが、選択肢は全てその条件を満たしている。ゆえに内容を検討する。

43行目と53行目はともに「――(ダッシユ)」が用いられている。ここは補足説明の用法。「羽織と時計」の説明が最後に記されている。「私の身につける物のなかで最も高価」であり、そのため「W君と私を遠ざけた」もの、それが「W君から贈られた」「羽織と時計」なのだ。この「プラスのものがかえってマイナスになる」皮肉なあり方に言及している④が正解となる。

これだけは覚えよう

・――(ダッシユ)の用法

a 補足説明(前後の連続性・同格を表す)

b 間を空ける(時間経過を表す)

・皮肉

a 期待に反する結果

b 遠回しな非難

【第3問 古文】(標準)

総評

出典Ⅱ『栄花物語』巻二十七「ころものたま」

平安時代後期の歴史物語からの出題で、妻を亡くした中納言長家の悲嘆が中心となる場面である。敬語や和歌が多用され、読解に苦勞する箇所もある。丁寧な主体判定が求められる。設問について。問1は単語の知識が中心だが、敬語や文脈への配慮も必要であった。普段の学習が報われる良問である。問2は従来の文法問題ではなく、傍線部に関する理由説明問題であった。直前「よろし」の理解が肝要。問3は共通テスト試行調査でも見られた新機軸の精読問題。文法知識と内容把握を総合した良問である。問4は人物に焦点を当てた内容一致問題。センター試験にも見られた形式である。問5は和歌に関する問題。『千載和歌集』と本文との比較であり、ここに共通テストの理念の一つ「複数文章の比較検討」が見いだされるが、必要とされる能力は和歌及び直後の文の精読である。「無常観」の理解も必須であろう。

今回の共通テストはセンター試験をほぼ踏襲していた。「複数テキストの比較・検討」も和歌に関するもので、センター試験でも散見されたものである。従来通りの学習で十分対処できる。なお、古典分野を短時間で解けると現代文に多くの時間を回せる。フアイト。

問1 解釈〔標準〕

解答

- (ア) ④ (イ) ③ (ウ) ①

傍線部の解釈を選ぶ問題。文脈的判断も重要だが、まず文法面から判断すると短時間で解答を出せる。「先処理→後文脈」を心がけたい。

(ア)「えくず」は「くできない」の意。②は不可。「まねぶ」は「まねをする・習得する・伝える」と種々の意味があり、判断が難しい。そこで直前に着目。「いへばおろかにて」の直訳は「言葉で言うといいかげんで」。これは「言葉では表現しきれない」と表現を放棄して強調する慣用表現。ゆえに④の「表現しきれない」を選べる。また、「くやらず」が「最後までくしきれない」の慣用表現であることも根拠となる。

なお、傍線部(ア)を含む一文は「草子地」といつて物語の作者が読者に直接説明を述べる部分である。「いへば」「まねぶ」の主語は作者。

(イ)「おはせ」は尊敬語。この時点で②・③・⑤に絞れる。「めやすし」は漢字で「目安し」＝「目で見て安心できる」様子。③の「感じのよい」が該当。直後に具体的な妻の美点が述べられているのもヒントになる。

なお、ここは長家の心内である。「いでやくあらん」までと、「何ごとにもくもてまありにける」までは「く」に入れると読みやすい。地の文でも人物が直接心情を述べる箇所がある。

(ウ)「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。ゆえに「ば」は仮定条件。これを反映しているのは①・②のみ。そして「里」は「実家」の意。女性基本的な家から出ないので、絵があるのも妻の家と考えられる。①の「自邸」が適切。

これだけは覚えよう

- ・えくず＝くできない
- ・おはす＝いらつしやる(尊敬)
- ・めやすし＝感じが良い・安心できる
- ・未然形＋ば＝くならば(仮定)

センター試験と比べて

不変の形式。単語・文法以外に文脈判断も意識しつつ、正確かつ明快な解釈を心がけたい。

問2 理由説明〔やや易〕

解答

①

直前分析の問題。単語の理解が決め手。

まずは傍線部を分析。長家が「今みづから」とだけ書いた相手を考える。傍線部は「内裏わたりの女房」から「さまざま御消息(＝お便り)」があったことと逆接でつながる。女房からのお便りに対して返事をしなかった、という内容だと推察できよう。ここで「よろしきほど」が重要。「よろし」は「よし(＝すばらしい)」と異なり「まあまあ・それなり」の意。プラスの意はない。それなりの関係性しかなかった女房には「今みづから(＝そのうち自ら返事・挨拶をする)」とだけ書き送ったのだ。以上より①を選ぶ。

これだけは覚えよう

・よし＝すばらしい

よろし＝まあまあ・それなり

センター試験と比べて

これも不変の形式。部分読解は、本文全体から雰囲気では考えられるのではなく、傍線部の近辺を精密に分析することが大切である。

問3 部分精読「やや難」

解答 ①

試行調査にも見られた、傍線部中の表現を文脈に即しつつ精密に分析する問題である。広範な知識が必要である。選択肢を順に検討する。

①が正解。問1で記した通り、「よくぞもてまゐりにける」は長家の心内。ここに尊敬語がないことから、主語は長家自身と分かる。直前には長家が妻の絵を枇杷殿に持参した旨が記されているので、①の前半の内容は適切。なお、「ける」は詠嘆の助動詞であり、選択肢後半の「しみじみと感じている」に合致している。

②は誤り。現代語の感覚だといふ選んでしまいがちだが、前後との整合性を意識したい。後の「よろづにつけて恋しくのみ」を考えるに、この「思ひ残すことなき」は「未練がない」ではなく「残らず全て思い出した」意であろう。

③も誤り。「まさに」は「くのでくにつれてく」と同じに「く」の意味があるが「それでもやはり」の意はない。(この意になるのは副詞「さすがに」である。)また、問5で和歌Yを分析すると分かるが、長家はまた妻の死を受け入れられていない。

④も誤り。時制に着目。ここでは妻と死別した今の場面では何かにつけて募る恋しさを記している。絵物語の焼失は過去のことである。心情の対象は正確に把握したい。

⑤も誤り。直後に尊敬の補助動詞を伴う「させ」は、使役対象が明示されていないかぎり尊敬の用法である。作者から長家への敬意を表す。

センター試験と比べて

センターでは見られなかった新傾向の問題。総合的学力が求められる良問である。短文精読の訓練を積もう。代ゼミの授業も利用されたし。

問4 内容一致「標準」

解答 ⑤

選択肢は人物ごとになっているが、一般的な内容一致問題と同様、本文の該当箇所との精密な照合が求められる。各々の選択肢を分析する。

①は誤り。大北の方も冒頭で悲しんでいた。「臥しまるばせたまふ」は悲しみのあまり泣き惑い駆けまわる様子である。

②も誤り。僧都の君の行動には「え見たてまつりたまはず」から分かる通り尊敬語が用いられているが、「かきおろして」に尊敬語はない。従者たちの行動である。

③も誤り。第二段落三行目に「夢を見たらんやうに」とあるが、ここには「あつてくれればよい」という願望系の語はない。(この「ん」は意志ではなく婉曲の助動詞。)妻の死を現実として受け入れられない長家の内面の描写である。

④も誤り。枕が浮くほど涙を流しているのは長家である。「契りけん」の歌の第五句「らん」に着目。これは現在推量の助動詞であり、視界外のことを用いる。主語は自分以外となる。

⑤が正解。傍線部(イ)の直後に記されている内容と合致する。(イ)の直前にも「何ごとにも」とあり、妻が全てに秀でていたことが分かる。なお、人物紹介は「抽象↓具体」の流れが多

い。「何ごとにも」の具体内容が「顔かたち・心ざま・手・絵」なのだ。

これだけは覚えよう
らん||現在視界外推量。主語は他人。

センター試験と比べて

王道の出題。精密な照合が必要なぶん、どうしても時間がかかる。ただ、選択肢の誤りは明確。細かいニュアンスを気にし過ぎないこと。

問5 和歌分析「標準」

解答 ③・⑥

『栄花物語』と『千載和歌集』との「返歌の相違」に関する問題。物語と歌集で相違が生じるのは古典の世界ではよくあること。設問では和歌の精密な分析が求められている。

まず和歌Xを見る。第五句末の「か」については、永遠に現世で生き続けることはできない、という無常観を理解していれば反語と判断できる。「無常の世なので悲しんでも仕方がない」という慰めがXの大意。悲しみを理解しない、誠意のない歌ではないので①は不可。

次に和歌Yを見る。第二句「方しなれば」がポイント。「方」は「方法」の意。人ではない。(第二段落より、「慰むる人」はたくさんいる。)

ゆえに⑤は不適。第三・四句「世の中の常なきこと」はXでも述べられた無常観を表す。返歌は本歌の内容を承けるものである。「同じ言葉を用いない」としている④は表層的な分析に過ぎず、不可。(同じ言葉を用いない↓励ましを拒む)にも当然つながらない。⑥はY自体も直後の

心内も適切に反映しており、正解。

最後に和歌Zを見る。上の句はここまで分析から無常観についてだと判断できよう。第四句「後るる」は「先に死なれる」意の重要単語。

②と③の後半がZの内容に触れているが、以上の解釈に忠実なのは③である。

これだけは覚えよう

- ・おくる＝先に死なれる
- ・返歌は本歌を承ける

センター試験と比べて

センターでも和歌分析は頻出であった。今回のように精密な解釈をするものと、修辞や比喩性を問うものがある。種々の原則も学ぼう。

【通釈】

大北の方も、故人と縁故のあった人々も、(悲しみに沈むどころか逆に)身体を地面に投げ出して転げまわりなされる(ほど悲しんでいらつしやる)。このことをさええひどく悲しいことだと言わずして、また何が(悲しいことだろう、いやこれ以上悲しいことなどなからう)と思われる。そして(亡骸を運ぶ)御車の後ろに、大納言殿、中納言殿、(その他)葬儀に参列すべき人々は歩きなされる。何とも言えないほどに悲しいことであって、表現しつくせない。北の方の御車や、女房たちの車などが(その葬列に)続いている。お供の人々は救えきれないほどに多い。法住寺には、いつものご訪問と異なる御車などの様子に、僧都の君は、(涙で)目の前が真っ暗になりな

って、拝見なされない。そして御車から(亡骸を)降ろして、次々と人々が降りた。

そしてこの御葬儀に際しては、皆その場に留まりなされるべき人々であった。(中納言殿は)山の方にぼんやり目を向けなされるにつけても、(山の木々は)自然な様子で様々な色合いに葉の色を変えていた、鹿の(恋する相手を慕って鳴く)鳴き声に御目もさめて、今になって少しづつ心細さが募りなされる。(中納言殿の姉の)宮たちからも悲しみを忘れるようにとのお便りが何度もあったが、(中納言殿は)今はただ夢を見ているようにばかりお思いになられてお過ごしになる。月がとてもしも明るい様子を見ても、(妻のことばかりが)残さず思い出されていらつしやる。宮中のあたりの女房も、いろいろとお便りをお送り申し上げるが、並一通りの関わりしかない人には、(中納言殿は)「今しばらくしたら自ら(お返事いたします)」とだけお書きになる。進内侍と申す人が、(中納言殿に)申し上げた。

契りけん……一緒だと誓った奥様に先立たれ、あなたは涙の海の底にいて、枕だけが浮いて見える(ほど涙を流している)ことでしょうか。

中納言殿のお返事は、

起き臥しの……寝ても覚めても一緒にいようという(妻との)約束は決して忘れられないので、枕を浮かすほどに私は涙を流しているのだよ。

また東宮の(子の)若宮の御乳母の小弁が
悲しさを……(悲しいでしょうが)その

悲しさを一方では忘れてくださいませ。誰もが最後まで留まれない(無常の)世なのですから。

(と詠み、それへの中納言殿の)お返しは、

慰むる……悲しみを忘れる方法がないので、世の無常のことなど今は考えられないのだよ。

このようにお思いになり、口に出していらしても、「なんと、(こんなに悲しいことがあっても)ものを感じる心はあるようだ、まして数年も経てば、(この死別の悲しみを)忘れてしまうこともあるかもしれない」と、我ながら情けなくお思いになる。「何事につけても『どうしてこんなに(優れているのだらう)』と感じのよい人でいらつしやったのになあ、容姿をはじめとして、お人柄(もよく)、文字も(上手に)書き、絵などもお気に召して、つい最近まで熱心に、(病気で)臥せりながらもお描きになっていらしたのになあ、この夏に描きなされた絵を、枇杷殿にお持ちしたところ、(枇杷殿は)とてもお褒めになって、お納めになったことだ、よくぞ私もお持ちしたものだよ」など、思い出さない残りが無いほどに様々なことを思い出すにしたがって、何かにつけて(妻を)恋しくばかり思い出し申し上げなされる。「長年描いて集めなされた絵物語など、すべて燃やしてしまった後、去年、今年になって集めなされた絵もとても多かったよ、自邸に戻ったときには、取り出しながら眺めて悲しみを忘れよう」とお思いになられた。

【第4問 漢文】(標準)

総評

出典 問題文Ⅰ 歐陽脩『歐陽文忠公集』

問題文Ⅱ 『韓非子』

漢詩と文章の組合せの出題であった。漢詩は昨年のセンター試験に引き続きの出題であり、対応できていた受験生も多かったであろう。設問の要求もセンター試験とほぼ変わらない。

内容は、優れた御者は人馬一体となって馬を操縦する、というもの。「人の心」が御術において最重要である、というテーマは比較的つかみやすかったと考えられる。

設問は問1が同意の語を選ぶという見慣れない形式であったが、問われていたのは基礎知識のみである。問2は文脈に合わせた多義語の解釈で思考を要する問題。問3は漢詩のルールである押韻の知識の活用だけでなく二つの問題文の比較検討を要する問題。問4は典型的な白文訓読の問題。句法の丸暗記ではなく「語法・文構造」が重要であったのも従来通り。問5は対句や助字の理解を総合的に問う解釈問題。問6は二つの問題文の主題を問うまとめの問題。全般として非常によく練られた良問揃いであった。

共通テストの要求もセンター試験とほぼ変わらない。句法の丸暗記に終始せず、「語法・文構造」の学習を欠かせないこと。丹念に根拠を拾う精密さも大切。また、漢字の知識は常日頃から増やしておきたい。語彙力は正義。表現分野の学習も怠らないように。

問1 語の意味「やや易」

解答 (ア) ① (イ) ⑤

同意の語を選ぶ知識問題である。

(ア)「徒」は「たダ」「いたづらニ」と読み、「たダ」は限定、「いたづらニ」は「無駄に」の意味である。本文は「伯樂は馬の価値が分かるだけである」と限定で解釈するのが妥当。①の「只」が同じく「たダ」と読む限定の字である。

(イ)「固」は「もとヨリ」と読み、「もともと・本来」の意。⑤「本」が意味・読みとも等しい。

センター試験と比べて

センターでは見慣れない形式であるが、単なる知識問題。複数の漢字の知識が求められているが、問われた漢字は全て基礎的なものである。

問2 語の意味「標準」

解答 (1) ⑤ (2) ③ (3) ④

語句の解釈を選ぶ問題である。全て多義語であり、文脈の中の判断が求められている。

(1)「何」は種々の疑問を表すだけでなく、反語や詠嘆の意味も持つ。文脈依存度の高い文字である。第一句「千里馬」は遠くまで走れる立派な馬。ひきしまつて美しいと推定できよう。ゆえにここの「何」は詠嘆の解釈が妥当。疑問や反語だと文意が通らない。なお、漢詩の解釈の際には「二句ひとまとまり」を意識するとよい。

(2)「周」はここでは動詞「尋」を修飾しているので副詞の働き。「あまねク」と読み、「全体的に」の意。文構造の分析も意味を把握する一助となる。また、第十一・十二句の内容もヒント。

(3)「哉」の解釈が重要。これも「何」と同様に疑問・反語・詠嘆の三種の意味を有する。ここでも「二句ひとまとまり」で考えよう。「両楽」すなわち人と馬の楽しみは「不相侵」、互いに侵食しあわない。両立する、ということである。これを参照すると、「至哉」は「至れるかな。すばらしいなあ」と詠嘆で解釈するのが妥当である。

なお、「与」が並列を表す助字であるという知識があれば、「人」と「馬」、「山」と「林」が並列と分かるので、②・③・⑤は不適と分かる。

これだけは覚えよう

・「哉・乎・耶・邪」

↓文末で「疑問・反語・詠嘆」を表す助字。必ず立ち止まって意味の確定を行うこと。

センター試験と比べて

文脈に即した解釈を求める問題はセンターでも頻出であった。解釈は古典学習の基本。知識の丸暗記だけでなく、「ここではどうか」を判断する訓練は引き続き必要である。

問3 漢詩の原則・文脈把握「標準」

解答 ②

押韻のルールを理解していることに加え、複数の文章を比較検討することが必要問題。

まず「偶数句末は押韻する」という原則に即して考える。偶数句末の韻は「臣」である。これに該当するのは②「心」・③「進」・⑤「臣」である(↓全て音読みがshin)。

ここで対句があれば根拠になるのだが、残念ながら傍線部Aは対句ではない。ゆえに文脈を

検討する。「在^レAニ」という表現は存在を表すだけでなく「Aが重要だ・A次第だ」という意味も持つ。では馬の速度を決定する上で重要なことは何か。【問題文Ⅱ】では「馬体安于車」との対句の形で「人心調于馬」と記されている。すると重要なのは御者の「心」だと判断できよう。

これだけは覚えよう

・押韻↓偶数句末(七言詩は第一句末も)は同じ音でそろえる。ラップと同じ。

・在^レA || 【読み】 Aに在り

・【意味】 Aが重要だ・A次第だ

センター試験と比べて

本問は複数文章の比較という共通テストの理念を体現しつつ表現重視というセンター試験の伝統も引き継ぐ良問。漢詩の学習も怠りなく。

問4 白文訓読【標準】

解答 ④

語法・文構造及び文意を踏まえた訓読が本問の要求。試行調査では「所」の語法が出題されたが、本問は試行調査に非常に忠実である。「所」は対象を表す助字であり、「Sノ所^レV^{スル}」||「SがVする対象」となる。②の「意ふ所」は不可。

次に「欲」に目を向けよう。これは後に動詞を伴って「欲^スV^{セント}」と読む、意志(時に推量)を表す語である。そして「適」は直後の句を参照するに「かなづ」より「ゆく」が妥当。ゆえに「適かんと欲す」と読む④が正解と判断できる。

なお、五言詩は原則として「二字十三字」の構造になる、という知識もヒントとなる。

これだけは覚えよう

・S 所^レV || 【読み】 SのVする所

・【意味】 SがVする対象

・欲^レV || 【読み】 Vせんと欲す

・【意味】 Vしようと思う

センター試験と比べて

変化なし。文構造・語法に基づきつつ文意も意識した訓読のトレーニングを積みみたい。

問5 解釈【標準】

解答 ⑤

送り仮名がない傍線部の解釈問題。対句や前置詞の用法など総合的な学力が問われている。

まず「後則欲速臣」と「先則恐速于臣」が対句であると判断できたか。対照的になっていない③は選べない。

「後」「先」は後を読めばそれぞれ「後る」「先んず」と分かる。「則」は「すなわち」と読み、因果を表す文字。直前は「已然形+バ」を送るので、「後則」「先則」はそれぞれ「後るれば則ち」「先んずれば則ち」と読む。「速」は「およぶ(とらふ)」と読むが、もし知らなくとも「逮捕」という熟語を想起できれば「追い付く・とらえる」の意味と判断できよう。「欲」は前問で記した通り。「欲速臣」は「臣に速ばんと欲し」と読み、「後則欲速臣」全体では「遅れると私に追い付こうとする」意になる。この時点で選択肢は②・⑤に絞られ、「先則」も踏まえると正解は⑤と分かる。

念の為「恐速于臣」も確認する。「于」は「於」

と同義。英語で言う所の「at/from/by/than/to」と種々の用法がある前置詞である。byは「by」である。襄王が先行している状況で恐れるのは「王良に追い付かれること」。この「速」は文意から「およばれ/コントロール」と受身で読もう。

センター試験と比べて

文構造・語法を踏まえた解釈問題は王道。送り仮名の有無によらず、精密に分析しよう。

問6 主題の把握【標準】

解答 ③

複数テキストを合わせて読み、共通する主題を把握する問題……となるとどうしても身構えてしまうだろうが、こうした全体把握の問題は「部分の総合」。今までの設問が十分にヒントになる。一から全文を読み直す必要などないのだ。

最も本問に貢献するのは、本問同様に二つの問題文を比較検討した問3であろう。「御術」において重要なのは「心」である。ただし言葉だけを見て安易に②に飛びつかないように。「馬の心」ではなく「人心」が重要なのである。「馬の体調」も関係ない。「人心調于馬」から分かるように、御者の心を馬に合わせる事が肝要なのだ。③「馬と一体となって」が適切。また、問5の分析から、襄王が馬と一体になれず王良のことばかり気にしていたと分かるので、「他のことに気をとられて…」以降も適切。

センター試験と比べて

「受験生の思考過程に沿って設問を並べる」とセンターの作成部会は述べていた。本問から

もその意図を感じられよう。最終問題だからといって時間がかかるとは限らない。国語は「テキスト分析」。精密な部分読解こそ全体把握・主題把握の最短の道である。

【書き下し文】

〈問題文Ⅰ〉

吾に千里の馬有り
毛骨何ぞ蕭森たる
疾く馳すれば奔風のごとく
白日に陰を留むる無し
徐ろに駆れば大道に当たり
歩驟は五音に中たる
馬に四足有りと雖も
遅速は吾が心に在り
六轡は吾が手に応じ
調和すること瑟琴のごとし
東西と南北と
山と林とを高下す
惟だ意の適かんと欲する所
九州周く尋ぬべし
至れるかな人と馬と
両楽相侵さず
伯樂は其の外を識るも
徒だ価の千金なるを知る
王良は其の性を得たり

此の術は固より已に深し

良馬は善馭を須つ

吾が言箴と為すべし

〈問題文Ⅱ〉

凡そ御の貴ぶ所は、馬体車に安んじ、人心馬に調ひ、而る後に以て進むこと速やかにして遠きを致すべし。今君後れば則ち臣に速ぼんと欲し、先んずれば則ち臣に速ばれんことを恐る。夫れ道に誘めて速きを争ふは、先んずるに非ざれば則ち後るるなり。而して先後の心は臣に在り。尚ほ何を以て馬に調はん。此れ君の後るる所以なり。

【通釈】

〈問題文Ⅰ〉

私は千里もの距離を走れる馬を所有している
毛並みと骨格は何と引き締まり美しいことか
速く走ればつむじ風のように
日中でも影を同じ場所に残さないほどだ
ゆつくり走れば大通りを往くにあたっては
駆ける音は伝統的な音階のようだ
馬には四本の脚があるが
そのスピードは私の思い通りである
馬車を操る手綱は私の手さばきに応じて
大きな琴と小さな琴のように調和する
東西と南北とを駆け回り
山や林を上つたり下りたりする
心が行こうと思う所ならば

中国全土をどこでも尋ねることができ
すばらしいなあ人と馬とは

お互いの楽しみを侵犯することがないよ
良馬を見抜く伯樂は馬の外面を理解するが
単にその馬が高価であると分かるだけだ

王良は馬の性質が分かっている
彼の御術はもたら非常に熟達している
良い馬は優れた御者を必要とする
私の言葉をいましめとするがよい

〈問題文Ⅱ〉

そもそも御者が重視することは、馬の身体を馬車に調和させ、人の心を馬に合わせることであり、そうした後に速く馬車を走らせて遠くまで行けるのです。今ご主君は（私より）遅れると私に追い付こうと思い、（私より）先行すると私に追い付かれることを恐れています。（しかし）そもそも馬を導いて長い距離を競走するということは、先行するのだから遅れるかどちらかしかないのです。（それなのに、ご主君は）私に先行するか遅れるかばかりを気にされ（馬のことを忘れ）ておられます。それでいったいどのように馬に心を合わせようというのですか、いや、それはできないでしょう。これが、ご主君が遅れてしまう理由なのです。

作成者 漆原慎太郎（代々木ゼミナール国語科）

※ 「共通テスト国語」

「共通テスト古典」担当講師

作成日時 二〇二一年一月十七日（日）